九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

醜形懸念の評価方法の確立および青年期における醜形懸念の特徴

田中, 勝則

https://hdl.handle.net/2324/1544040

出版情報：九州大学, 2015, 博士（心理学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

KYUSHU UNIVERSITY

氏　　名	田中　勝則
論　文　名	醜形懸念の評価方法の確立および青年期における醜形懸念の特徴
論文調査委員	主　査　　九州大学大学院人間環境学研究院　教授　　黒木俊秀 副　査　　九州大学大学院人間環境学研究院　教授　　田嶌誠一 副　査　　九州大学大学院人間環境学研究院　教授　　増田健太郎 副　査　　九州大学大学院人間環境学研究院　准教授　古賀　聡

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は大きく先行研究のレビュー，醜形懸念の評価法の確立，醜形懸念の特徴や関連要因の検討，そして，総括の 4 つのパートで構成されている。

第 1 章ではボディイメージと醜形懸念に関連する先行研究のレビューを行い，本研究における研究課題として，醜形懸念の評価法の確立と醜形懸念の特徴や関連要因の検討を行うことの必要性について論じた。

第 2 章では，醜形懸念のアセスメントツールとして，Littleton et al (2005) による Body Image Concern Inventory (BICI) の日本語版 (J-BICI) を作成し，醜形懸念が高まる時期である青年期に相当する大学生を対象に，探索的因子分析による J-BICI の因子構造の検討を行った結果，先行研究とは異なり，J-BICI は独自の 3 因子構造を有することが確認された。新たに調査対象者を追加し，J-BICI の 3 因子構造について，確証的因子分析による検討を行ったところ，3 因子構造が先行研究で確認されている 2 因子モデルや 1 因子モデルよりも良好な適合度指標を示すことが確認された。これらの結果に基づき， J-BICI の信頼性および妥当性の検証を行った。その結果，J-BICI は信頼性および妥当性のいずれにおいても十分であり，心理測定学的に不備の無いことが確認された。さらに、調査対象を一般地域住民に拡大し，J-BICI の 3 因子モデルの検証を行った。同サンプルを用い，J-BICI のカットオフポイントについても暫定的に検討を行った。その結果，3 因子モデルが男女を問わず有用であることなどが明らかとなった。以上の結果から，J-BICI が研究および臨床においても有用なツールであることを示した。

第 3 章では醜形懸念の特徴について検討することを目的とした。まず，醜形懸念の性差について検討を行った。その結果，醜形懸念は男性よりも女性において高い傾向にあることが明らかとなった。次に，生涯発達的な視点から醜形懸念の検討を行った。その結果，男女ともに醜形懸念は 20 代がピークであること，加齢に伴い低下していくことが明らかとなった。

第 4 章では大学生を対象に，醜形懸念の関連要因の検討を行った。第一に，醜形懸念に関連する不安や心配の対象となりやすい身体部位や身体特徴の検討を行った結果，男女間で身体部位や身体特徴ごとに不満足感に差異が認められた。次に，醜形懸念，アレキシサイミア，ネガティブ感情の関連について検討した。相関分析の結果，ネガティブ感情を統制した上でも，醜形懸念の下位因子はいずれもアレキシサイミアの下位因子である感情同定困難 (DIF) 因子と有意な正の相関を示した。重回帰分析の結果，DIF 因子のみが醜形懸念のいずれの下位因子とも有意な正の関連を示したことから，アレキシサイミアの特徴のうち，感情同定困難が醜形懸念に関連していることが推察された。また，醜形懸念と完全主義認知との間に関連が認められたことから，完全

主義認知への介入を通じた醜形懸念の改善可能性について考察した。さらに，自己注目に着目した醜形懸念の認知行動モデルの検証を行った結果，自己の容姿への注目をきっかけに容姿への否定的評価（NE）が高まり，容姿の問題に対する安全確保行動（SB）や容姿の問題からの回避行動（AB）が惹起されるという仮説が支持された。最後に，高い醜形懸念を有する群における対人的な認知の検討を行った。高い醜形懸念を有する者は，男女ともに高い水準の他者からの否定的評価への恐れ（FNE），外的他者意識，社会規定的完全主義を示す傾向が認められた。女性においてのみ，高い醜形懸念を有する者は，内的他者意識も有意に高い水準の得点を示した。

第 5 章では本研究の総括を行い， J-BICI の利点と限界について考察し，本研究のデータにもとづき，醜形懸念の支援に向けた包括的な段階的アプローチを提案した。また，研究の方法論および醜形懸念の構成概念の視点から，本研究の限界を整理し，今後の研究に向けた課題の提示を行った。

以上のように，本研究は，醜形懸念の評価方法である J-BICI を作成し，その信頼性，妥当性を確認して，研究および臨床的有用性を示した。また，J-BICI を用いて，とくに青年期における醜形懸念の特徴を明らかにし，臨床的介入ための認知行動モデルを解明した点で，臨床心理学的に意義深い成果を挙げている。よって，本論文は，博士（心理学）の学位に値するものと認める。